

平成 29 年度評価委員会の結果（平成 28 年度終了課題に対する事後評価）

<評価委員一覧>

氏名	現職等
後藤 晋	東京大学大学院農学生命科学研究科 附属演習林教育研究センター 准教授
滝田 早苗	埼玉県山林種苗協同組合 理事長
設楽 幸裕	こだま森林組合 代表理事組合長

※所属は、平成 29 年 10 月現在のものです。（敬称略）

<評価結果>

研究課題名	花粉症対策・施業低コスト化のための優良種苗生産システムの開発	
研究担当	育種・森林資源担当	
研究期間	平成 24～28 年度	
研究概要	<p>(1) ジベレリン散布による着花促進処理の結果、品種によって雄花量の少ない品種、雌花量の少ない品種が明らかになった。また、交配袋内への花粉注入は 1 週間程度時期をずらして 2 回実施することで授粉できることが明らかになった。</p> <p>(2) 人工交配により得られた実生を苗畑で生育した結果、播種後 3 年経過した時点で交配組み合わせによって苗木の初期成長に大きな差が見られた。生育調査の結果から、愛甲 2 号、比企 1 号及び河沼 1 号を雄親・雌親として使うことが適当と考えられた。</p> <p>(3) サイズを変えた M スターコンテナ（ショート：φ6cm×H8cm、ロング：φ4.25cm×H16cm）にスギ・ヒノキ種子を播種し、苗高を測定した結果、スギではロングが、ヒノキではショートが高い成長を示した。樹種の根系特性によって適正なポットの大きさがあることが明らかとなった。</p> <p>(4) 大苗の植栽により植栽時の労力は大きくなるものの、アンケート調査によって作業路密度の高い山林であれば工夫次第で十分可能であることが明らかになった。苗畑での育苗間隔 15・30 及び 45cm で生産したスギ実生苗木ではいずれの苗木でも 90%以上の活着率を示した。植栽時は育苗間隔 45・30>15cm の順で有意に苗高が大きかったが、植栽後 4 年経過後では苗高は並ぶことが明らかになった。</p>	
研究評価	評価の要素	目標達成度：b
		活用見込み：a
	総合評価	A